

【親鸞（中学）部門・優秀賞】

輝く命

大谷中学校 第3学年 林 実優

「健康な身体で生まれてくるのは当たり前ではない。」

「明日が来るのは当たり前ではない。」

という事を私の人生において学ばせてくれたのは四歳年上の兄だ。兄は生まれた時から下半身が動かない。皆が当たり前のように歩む成長段階を幾度も大回りしながら、人一倍、努力を重ねて歩んできた。しかし、いつ何時も兄は明るく、決して弱音を吐いた姿を見たことはない。それは、もはや与えられた命を目一杯楽しんでいるようにしか見えなかった。

兄が低学年の頃は長期の入退院が続き、当時保育園児だった私は別々で暮らす生活が増えた。兄は入院中、同室で闘病している子達と友達になり、入院生活も充実している様子だった。辛い治療の時は互いに声をかけ合い、本人同士にしか分かり合えない絆ができていたと、母から聞いた。退院してからも連絡を取り合い、関係が続けていた兄だが、その後戦友だった二人を順に空へと送ることとなった。当たり前のようにくる明日は当たり前ではなかったのだ。

病気をもってうまれてきた兄の妹であるから、もしかしたら「命」のともしびを身近に感じ、目の当たりにすることが人よりも多かったかもしれない。でも、いつの日も、どの命も、一生懸命生きていた。そして何より輝いていた。

どんなに辛い日があろうと逃げずに明日を生きるために命を大切にすること。自分が今、命があって生きていることは、ある意味奇跡なのだということを胸に抱きつつ。

「一度きりの人生楽しまないと意味がない。」と話す兄の言葉を励みにしながら。

私の宝物、それは、かけがえのない「命」だ。